

心豊かな暮らし

<http://www.yabashi.co.jp/house/>

縁_{en}

2015 Vol.35 summer





季刊

縁_{en}

2015 Vol.35 summer

心豊かな暮らし

contents

P 3 >>

特集

夫婦ふたりの「これからの家」ー 岐阜県大垣市 I 様邸

P 7 >>

矢橋の家

「欧」モデルハウス

P 11 >>

和宮御膳

赤坂宿本陣御膳

P 13 >>

世界に認め続けられるlucano

脚立ひとつで暮らしが変わる 長谷川工業株式会社

連載

中山道赤坂つれづれの記 文/故 清水春一

江村北海(一)

表紙写真 牡丹園内 ノウゼンカズラ

P1 「欧」モデルハウス Entrance Hall

P2 「欧」モデルハウス Drawing Room

OU MODEL HOUSE

欧^{OU}





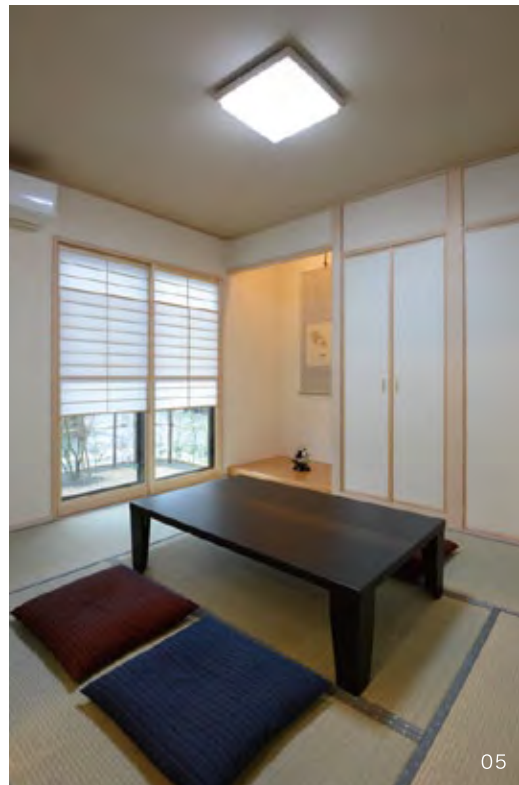
03



02



06



05



04

- 01 平屋の空間に広がりを見せる梁見せ天井が印象的なリビング。窓を開けるとウッドデッキにつながる
- 02 玄関には使い勝手の良い土間収納が。ご主人こだわりの暖簾がかり、空間を閉め切ることなく区切っている
- 03 ウッドデッキで仲良くくつろぐご夫妻
- 04 玄関ホールには地窓があり、寄せ植えが可愛らしく覗く。壁にさっと生けられたお花がアクセントに。暖簾で目隠しした土間収納には、靴などがスッキリ片付けられている
- 05 雪見障子の本格和室。床の間には季節の軸と奥様が生けられたお花が飾られている
- 06 玄関に飾られている寄せ植え。休日には夫妻で園芸屋巡りを楽しんでいるそう

■ 特集

夫婦ふたりの「これからの家」

岐阜県大垣市 I様邸

I様は平屋建ての家を、夫婦ふたりの終の棲家(ついのすみか)として建てられた。I様は、本誌「縁」をきっかけに矢橋の家を知っていただき、和モデルハウスにお越しいただいた際に、外観や落ち着いた深い色合いが、建てたい家のイメージにぴったりと気に入っていただいた。

「ずっとアパートだったので、いつかはマイホームをと思い続けていました。これからは季節の移り変わりや、好きなものに囲まれて暮らしを楽しんでいきたい」と、嬉しそうに語られるご夫妻。



営業担当 住宅部 課長 金森善彦

「和」モデルハウスをご見学いただいたから、ちょうど5年。待ちに待った「終の棲家」が完成いたしました。こんな事がしたい、あれもしてみたいと、長年、これからの暮らし方や楽しみ方を思い描いていらっしゃったのです。

取材をさせていただいたとき、奥様の手料理をご馳走になってしまい、ご夫婦の「お・も・て・な・し」に、とても感動いたしました。

設え、持成、振舞、楽しんで暮らしていただけることがとても嬉しく思います。

01 居心地の良い掘りごたつに座して食す。奥様お気に入りの京都の町家にある格子の雰囲気を取り入れた

02 廊下にはたっぷりと収納があり、リビングをスッキリさせている

03 洗面の奥には勝手口。収納があり、この場所に必要なものがまとまっている。

04 矢橋オリジナル収納棚には、散らかりがちな新聞や雑誌をまとめて収納。きれいなお花も飾られている

05 オリジナル造作には、リビングに必要なものだけがきれいに収納されている

06 奥様が初挑戦されている家庭菜園

07 庭に咲くミヤコワスレの花

08 雨水タンクの水を、家庭菜園の水やりに活用している

09 お庭の水やりはご主人の担当

10 平屋建ての外観



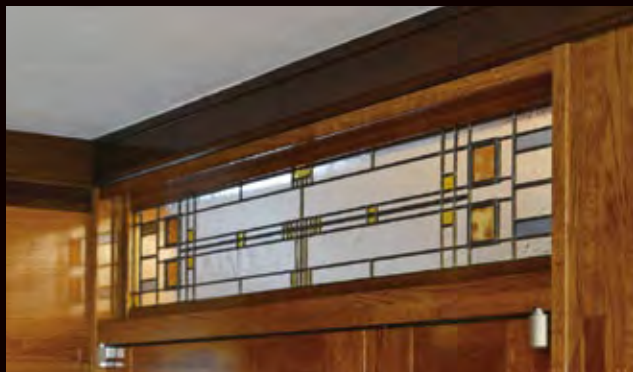
心豊かな暮らし

01



“こだわり”を大切に、暮らしを楽しむ

家全体が整い、すっきりとして気持ちの良い印象の様邸。必要なものが必要な場所にあり、自分たちにとって何が 필요한のかをよく知っている。また、どんなものを飾って暮らしを彩りたいかという、ご夫妻のこだわりが伝わってくる。「家に帰ってくることが楽しみになりました。まだ暮らし始めたばかりなので、これからの暮らしに夢がふくらみます」とご主人。休日には、観葉植物や家具、暮らしを彩る“お気に入り”をお二人で探しに行かれるそう。季節に合わせて絵を掛け替えたり、お庭で育てたお花をさっと生けて飾ったり…。取材させていただいた私たちも、丁寧に、もてなしていただき、自然に人と人とのつながりを大切にされるご夫妻の暮らしはまさに、“心豊かな暮らし”という言葉がぴったりだ。



Main Bedroom



Living Room

木と土と石を使った近代西洋建築の復刻モデル

OU
欧



心豊かな暮らし
矢橋の家

OU MODEL HOUSE 誕生

古来より人は、安全かつ快適に暮らすために、自然の中から素材を選んできました。更に文化が成熟してくると、更に美しい素材を選んで、そこに更に美しく見せる加工を施して住まいに使用するようになりました。茶道の茶室など、数寄者（茶道の求道者）は自己の美意識を反映させ、茶室と広間で構成された数寄屋建築のスタイルを築き上げました。

近代の日本では伝統的な日本家屋に加え、明治以降近代西洋文明が流入し、日本ならではのきめ細かい、繊細な納まりの西洋建築が数寄屋の日本家屋と共に、財閥のオーナー、地方の素封家の邸宅として建てられました。木と土と石が日本でも西洋でも主な素材でした。木の造作も、石の石目をあわせた微妙な曲線の加工、左官の漆喰塗りの技術など、日本的で繊細な、細部まで精度の高い工事を実現した建物が多く残っています。

現代のデザインはすっきりとした機械による加工を多用し、加工コスト低減を優先したデザインが主流となり、現在では多くの住宅建築において建材は買うもので、作るものではなくなってしまいました。しかし、歴史に残ってきた建築作品は人の手の技能による造作を施した作品が多いのです。

家は人が住んで毎日暮らしを営む場所です。機械のように全く正確ではないけれど人の手の暖かさを残る建材を少しでも多く使うことが、矢橋の責務だと思っています。

「欧」は、木と土と石を使った近代西洋建築の復刻モデルです。

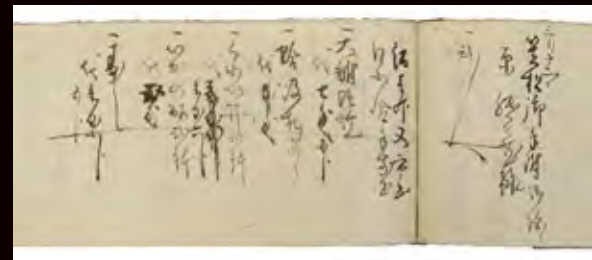
矢橋林業株式会社
代表取締役社長 矢橋龍宜

赤坂宿本陣御膳

中山道赤坂宿本陣宿帳に載る献立を元に、中山道赤坂宿まちづくり連絡協議会が中心となり、地元や諸藩の役人たちに出された献立を再現した膳。



アユやウナギ、フナ、タニシなど、濃尾平野の水産資源を活用した料理。それらを味付けたのは、西美濃特有の味噌やたまりであったと思われる。幕末であったため、砂糖やだしの文化の影響も感じられる。



慶応元年（一八六五）
三月十二日、
笠松御手付が宿泊した際の献立

三月十二日
笠松御手付 御泊り
原純蔵様
一、三人
酒肴升 又市出
同五合 手前出
一、大鮎塩焼
代七匁五歩
一、蛤吸物 四つ
代七匁
一、くわい井 式鉢
代七匁六歩
一、いかの酢 式鉢
代五匁
一、寿し
代七匁五歩



慶応四年（一八六八）
正月十八日
御作事御奉行
一、長屋定平様
一、桐橋専治郎様
外に各人
一、本三人
一、酒 十後出
一、ふな大根 式鉢
代七匁
一、大平 三つ
代七匁五歩
一、吸物 三つ しろ魚
代三匁
玉子



慶応三年（一八六七）
二月十二日 見分
御作事下役
増田増蔵様
堀十代之助様
以下四人
（中略）
同晩
一、本四人
一、茶代
一、酒 与市出
一、鮎味噌たき
代七匁五歩
一、田螺井
代七匁五歩



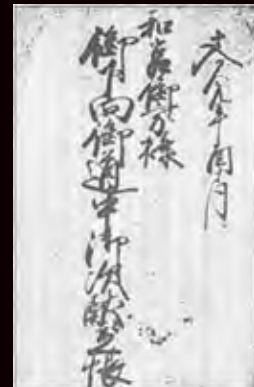
慶応三年（一八六七）
九月九日 御昼
御堤方
一、上下四人
一、茶代
一、酒 与市又出
一、鮎 式鉢 塩焼 数二本
味噌焼
代金吾分壹朱
一、大平 三つ
代七匁三匁
一、仙石豆 三つ
代七匁三匁
一、土生魚汁（せう汁）
代七匁八匁

お問い合わせ先
中山道赤坂宿まちづくり連絡協議会 赤坂まちづくり塾 福来里（ふらり） 岐阜県大垣市赤坂町3004-1 TEL.0584-71-0228

和宮御膳

中山道赤坂宿で皇女和宮が食した「朝飯」を史実に基づき、赤坂まちづくり塾 福来里（ふらり）によって再現された膳。

仁孝天皇の皇女、和宮親子内親王（当時16歳）は、文久元年（1861年）10月、徳川14代将軍家茂のもとへ降嫁した。総勢7,800余名の行列は、京都をたち中山道を通り江戸へと向かった。一行は10月25日赤坂宿に宿泊した。この御膳は、翌26日の朝食を再現したものである。



和宮行列に同行した膳所藩の賄い
西村藤八が残した道中の献立帳
文久元年十月
和宮御方様
御下向御道中御次献立帳
十月二十六日、赤坂宿朝飯
平皿 鮎、山の芋、干びよう、
午房、薄葛、志いたけ
汁 赤味噌、大根井頂切
香の物 同断
御飯
猪口 大梅干、大安掛
焼物 若サ小鯛塩やき



小鯛の塩焼きやアワビ、酒のうまみを含んだ大梅干など豪華な料理が並ぶ。味付けは江戸時代に使われていた塩、味噌、たまり、かつお、梅干、酒、はちみつのみにも関わらず、滋味深くやさしい口当たり。

現在も、毎年秋に皇女和宮行列等を再現し往時をしのぶ「中山道赤坂まつり」が開催されている。



中山道赤坂宿
中山道六十九次の五十七番目の宿場町として栄えた。本陣・脇本陣をはじめ旅籠屋十七軒と商家が軒を並べ、美濃国の宿場町として多くの人々で繁栄したと言われている。



小簾紅園（おずこうえん）
赤坂宿を出てすぐに揖斐川の呂久の渡し場で御座船の中で詠まれた歌から京の都が遠ざかって行く、せつない思いが伝わってくる。この歌の歌碑が公園内に建てられている。（岐阜県瑞穂市）

落ちてゆく
身と知りながら
もみち葉の
人なつかしく
こかれこそすれ

はしご、脚立のオパियोニア



長谷川工業株式会社 Hasegawa Kogyo Co.,Ltd.

代表者 代表取締役社長 長谷川泰正

創業 1956年12月

本社 大阪府大阪市西区江戸堀2丁目1-1 江戸堀センタービル14F

資本金 9,000万円

社員数 190名

主要製品 総合仮設機器 家庭用作業用品 イベント機材
自動車用品 園芸用品

許認可 JIS許可工場・労働基準局許可工場
製品安全協会認可工場
ISO9001 認証(登録番号0826)
金属製避難固定はしご消防法型式認可

支店 東京支店・大阪支店

営業所 札幌営業所・仙台営業所・名古屋営業所・広島営業所・福岡営業所
HASWAGAWA USA, Inc. 東莞長谷川金属制品有限公司【上海分公司】

工場 群馬工場・大阪工場・西協事業所・東莞工場・ベトナム工場

世界に認め続けられるlucano 脚立ひとつで暮らしが変わる



使って感じる、
こだわりの機能。

安全性だけでなく使いやすさにもこだわりました。

長谷川工業様と弊社とのつながり

長谷川工業様よりオーダーをいただき弊社にてオリジナル搬送機を製作させていただきました。



脚立を組み立てる際、開梱した加工部材を受け入れ場所から組立装置まで(約30m)自動搬送をする機械。
脚立の支柱、踏棧、結合金具の3種類の部材をそれぞれ必要な場所まで搬送することができます。

この搬送機以外にも、長谷川工業様と協業して様々な機械を製作させていただいております。



幅が広く、滑りにくい波型ステップ



折りたたんだ状態でも自立可能



簡単・安心に取り扱えるワンタッチパー



安全な昇り下りを支える、女性にも握りやすいサイズのハンドル
※ハンドル付きは、3-stepのみ

脚立の置き場所といえば押入れや物置が定番かもしれませんが、あえてお部屋に置いておきたい、美しいデザインの脚立です。お部屋におひとついかがですか？

販売代理店 矢橋林業株式会社 鋼材事業本部 担当:成瀬 0584-71-1023

日常にデザインを 使い方、いろいろ。

使い方次第で、日々の暮らしがよりスマートに、よりスタイリッシュに。
カタチだけではない、その先にある時間もデザインしました。



BE SMART.
lucano
Step stool / 1-step 2-step 3-step

江村北海(一)

うみゆり連載集

中山道赤坂つれづれの記

故清水 春一

昔、江戸時代の中山道は五街道の一つとして日本列島の中央を、京都から江戸まで東西に貫いた第一級の重要な国道でした。そしてこの道を往来する大名行列や旅人で賑わい、沿道の町や村、特に宿場町の繁昌したことはいうまでもありません。

最近、岐阜県では来年(一九八八年)に迎える「岐阜中部未来博」を成功させ、新しい時代へ向けての活性化に結びつけようと張り切って、その準備が進められています。これに合わせて、県内の中山道沿線に連なる市町村が連合して「美濃中山道連合」と呼ばれ、かつての繁栄を回想しながら、中山道大行進など二十一世紀への逞しい前進をしようということで、いろいろのイベントが企画され、準備中と聞きました。来年の実現が楽しみです。

中山道が改めて見直され、現代社会に浮上してきました矢先、中山道六十九次のうちの第五十七番目の「赤坂宿」を支えてきた赤坂の人たちと、それぞれの時代に生きて交流してきた人々にスポットを当てて紹介しているのが、この「金生山シリーズ」です。

こうして、ふるさとを振り返り、先輩祖先の

業績を訪ねて、その尊い人柄を偲ぶことがいかに大切なことか、ということをしみじみと痛感いたします。

『うみゆり』が、既に何年も前から取り組んでこられた事柄に、ようやく県や市町村も追いつき、同じ考え方に立って社会発展の一助にと、実践計画に取り組まれたことに心から敬意を表します。

赤坂漢文学の立役者

何はさて、美濃国の漢文学の上に大きく影響を与えたのは、十八世紀の中ごろから十九世紀へかけての時代で、その第一は京都の儒者江村北海であり、第二は頼山陽ではないかと思えます。事実はまだにそのとおりでした。

宝暦九年(一七五九)六月、丹後宮津(京都府)城主青山幸道侯が、美濃国郡上八幡城主として転封になったため、当時、都でも第一級の儒学者であった江村北海は、招かれて郡上八幡青山侯の客師となり、同藩の藩校「潜龍館」を創設したり、文化教育の振興に大いに尽しました。

また北海が、京都から郡上八幡への往来に、その途次は必ず赤坂宿を通りますので、当然のことながら、北海の弟子(門下生)であつた矢橋赤山・赤水兄弟をはじめ、矢橋の総本家の丹陽・柳崖父子などを訪ねて、宿泊、休養など、諸子と風雅の交わりを重ね、詩文を評釈し、学問を論じ、或いは揮毫を求められたりしております。それらの人々とともに金生山に遊んで詩酒を嗜んで、濃尾平野の眺望を楽しみに語り合ったことでしょう。

また、大文豪と称される頼山陽が上洛して、京都三本木の水西荘に居を定めたあと、初めて美濃に来遊したのは、文化十年(一八一三)の秋十月のことでした。まず赤坂宿の矢橋赤水を訪ね、次いで関、美濃、郡上八幡を訪れ、大垣に立ち寄り名古屋など遊歴して、帰路また大垣に寄って京都へ帰っています。それ以来、美濃の多くの人々との交流が生まれ、多くの弟子が育まれました。

このように美濃の文化教育の向上に大きく影響したのは、江村北海と頼山陽に負うところは他に例をみないほどでしょう。

矢橋赤水は、本名を徹、通称を勝三郎とい

い、字は美圃(みう)といました。赤山は雅号であつて、別に老楓とか、紅於とも名乗っています。その住いの亭を「翠微亭」と称し、大宇宙に向かつて逞しく亭々と聳える金生山の青々(碧)とした緑(翠)の微に入つたる様子、大自然の中に悠然と構えた雄大と温容を意味している名だと伝え聞いております。その「翠微亭」の扁額を揮毫したのが、彦根藩井伊家の儒学者で有名な龍草廬(公美)の書が今も遺されています。

その赤山の異父弟が赤水であり、この兄弟が揃って京都で江村北海と師弟関係に結ばれていました。そうした因縁から美濃赤坂とは深いつながりがあつて、郡上八幡ともども北海の偉大な学問文化の影響をうけてきたのです。

このようにして、江村北海、頼山陽両文豪ともに赤坂宿の矢橋氏との因縁深い交遊があり、彼らの来訪が美濃国の学問文化の発達につながっていった、ということは誠に意義深いものがあります。

